新しいママがやってきた
息子はママに
女の温もりを
教えてもらうために
ママの入浴中に
裸で風呂場へ向かう！

2

ユウジのママは不慮の交通事故で死んでしまった。
茫然自失状態で、食べ物も口にできない日々が続いたユウジの元にやってきたのは新しいママだ。
父親は仕事で忙しいため、学校のない日は一人で留守番することの多かったユウジの自宅に、ある日突然新しいママやって来たのだ。

「だっ！！誰っ！？おばさんっ！！ここ僕のうちだよ！！」
お客さんならチャイムを鳴らすか、あるいは玄関の靴脱ぎ場で声をかけるはず。
リビングのソファに座ってテレビを見ていたユウジの元へ、突然ミニスカートを穿いた髪の長くて綺麗な女性がやって来たのだ。
年齢は自分よりはかなり年上だとは分かったが、ミニスカートから露出するムッチムチの太ももは、若々しく街を歩いている女子高生などよりもずっといやらしい。

「驚かないでっ！ユウジ君！」
「えっ！？ど、どうして僕の名前を！？僕、おばさんのこと知らないよ？？」
ユウジは何も知らされていなかった。
どうせ息子が反対しても自分の意思は変えないと決めていた父親は、事前にわざわざユウジに知らせることをしなかったのだ。
驚くユウジに彼女は優しく語りかけるように言った。
「あたしはあなたの新しいママよ！」

こうしてユウジと新しいママとの新しい日々が始まった。
彼女の名前はミキナと言う。

新しい妻が家にやってきて以降も、どうしても仕事が忙しく家を空けることの多い父親。
必然的に一人っ子のユウジはミキナと一緒に過ごす時間が多くなった。
ミキナは食事を作り、掃除をし、あらゆる主婦としての仕事をそつなくこなす出来る女性。

そして同時に柔らかい心を持った人物でもあった。

以前の実母こそ本当の優しさだと思っていたユウジに、新しい感情が芽生える。

優しい・・・。
ミキナママが優しいよ。

別の優しさ。ミキナママが持つ包容力のある柔らかい雰囲気は、確かに別の優しさであった。

そしてユウジは思った。
ミキナママのおっぱいが吸ってみたい・・・。

別の優しさを持つママの体の味をユウジは知りたかったのだ。
そして同時にユウジはまだ体験したことのなかった女性というものの温もりを知りたくて仕方がなかった。

体験版はここまでです